

特集 マスギャザリング・メディシン

DMAT 研修や MIMMS など、現在行われている多くの災害医療教育は、大規模災害を想定された内容となっています。「マスギャザリング (mass gathering)」は、そのなかの一部として取り上げられることもありますが、マスギャザリングのみを系統的に学ぶ機会は少ないのではないのでしょうか。実際に本誌『救急医学』でも、これまでマスギャザリングのみを取り上げた特集はありませんでした。そして、大規模災害とマスギャザリングでは、その医療対応の考え方の原則は同じかもしれませんが、負傷者と医療リソースの関係からも、まったく同じではない細部があるように思います。そこで今号では、「ラグビーワールドカップ2019日本大会」の開催に日本中が熱狂し、東京オリンピック・パラリンピックまで1年を切り、そしてその先には2025年の大阪万博も控えたタイミングで、災害医学/医療の第一人者の先生方、マスギャザリング各領域の最前線で活躍されていらっしゃる先生方に総出演いただき、現時点でのわが国の「マスギャザリング・メディシン」のテキストと呼べるような1冊を目指し、特集しました。

とくに本特集では、一生経験する機会がないかもしれない国家的・超大規模なマスギャザリング事例の紹介・記録だけでなく、現場で活躍する救急医やこれから救急医になる先生方が、実際に自分の職場の近くで、地域的なレベルで、マスギャザリング・イベントの医療担当者や責任者になった場合に参考にし、実践できるような内容にしたいと考えました。すなわち、読者の皆さまが医療・救護体制で中心的な役割を担う場合に、あるいは周辺地域での搬送受け入れなどサポート的な役割を担う場合に、どの

ように準備し、どのように対応し、そしてどのように振り返りを行えばよいのか、といった実践的な想定に基づいて、「マスギャザリング・メディシン」のこれまでと現状を解説いただいています。マスギャザリング対応には入念な準備が不可欠であり、どの程度“想定外”を減らせるかを考えて、関係各団体と調整していくことが必要です。これはまさに多職種連携であり、救急医の日常業務の延長線上にあります。そして、もはや防ぎ得た死亡を減らすことは当たり前であり、これからの「マスギャザリング・メディシン」は、後遺障害を少なくすること、これまで助けられなかった重症患者を助けることにもつながればと考えています。

2020年にむけて、コンソーシアムなどを中心に医療面でも各団体さまざまな準備が進められており、さらに広がっていく救急医の活躍の場として、その成果に寄せられる期待は大きなものです。そこへと向かう道標として、本特集が2020年以降の“レガシー”の礎になればと考えています。そして昨今、多くの方が犠牲になる交通事故や無差別殺傷事件も数多く報道されています。そこで本特集の最後では、「マスギャザリング」の定義からは少々外れますが、同じく多数傷病者対応の課題として、このような事案での犠牲を1人でも減らすために救急医ができることを、新井隆男先生、根本学先生とともに検討しました。ぜひ参考にいただき、明日起こるかもしれない“いざ”というときに、備えてください。

『救急医学』編集委員会
企画担当：親樹会恵泉クリニック
太田 祥一